和・漢・洋「ことわざ辞典」

（1）私たちは往々にして、目の前の些細なことを気にするわりには、広い見地でものごとを考えることを忘れがちです。特に損得にかかわる場合、その傾向が強いのではないでしょうか。

【ことわざの例】

・**日本**／「一文惜しみの百知らず」（目先のわずかな損得に気をとられ、大きな意味での損失に気づかない愚かさをいう）

・**中国**／「指を惜しんで掌を失う」（わずかな損を惜しんだ結果、大きな損失を被ることのたとえ）

・**西洋**／「Kill the goose that lays the golden egg.」（金の卵を産むガチョウを殺す。つまり、目先の利益に目がくらんで、後々、大金をもたらしてくれるだろう大本を、みすみす失くしてしまうこと）

（2）能力や力の有る無しよりも、どれだけ一心に思っているかが、その人の人生を決める場合もあります。

【ことわざの例】

・**日本**／「蟻の思いも天に届く」（たとえ弱小で非力であっても一途に念じれば、その思いは達成されるということ）

・**中国**／「一念天に通ず」（どんなことでも強い信念をもってあたれば、真心は天に通じ、運命は切り開かれるということ）

・**西洋**／「A man's will moves heaven.（人の決意は天を動かす）

〈注：本欄でご紹介することわざには、他にも類するものがある場合もあります。また、日本のことわざには中国の故事に由来するものもあります〉

仏事の豆知識 お寺めぐり

新型コロナウイルスの収束見通しも立たないなか、どこにでも伸び伸びとは出かけられませんが、マスクなど防備をしっかりとして、近隣の「お寺めぐり」をなさってはいかがでしょうか。知名度の高いお寺ではなくても、そのお寺ならではの良さが必ずあるものです。

また、どのお寺にお参りする際も礼を失することのないように、山門でまず一礼し、本堂での礼拝を忘れず、仏像には敬意をもって手を合わせましょう。そうして心静かに境内に佇むだけでも、普段の暮らしでは味わえない穏やかな空気にひたれるはずです。

春の息吹が感じられるこの季節、自然を愛でながら、目的のお寺への道中も併せて楽しんでいただければと思います。

（＊拝観することが可能かどうか、事前に各お寺に問い合わせることをおすすめします）

生活の中の仏教語 馬鹿

一般に、「馬鹿」という言葉には実に多様な意味合いがあり、「お前は馬鹿だ」と言われても、その状況によって、腹の立つこともあれば、怒るどころか笑顔で聞き流せる場合もあります。

ほかにも、「馬鹿丁寧」「馬鹿正直」などは、その程度が度外れているさまをいい、「親馬鹿」「役者馬鹿」などは、特定の物事に熱中しすぎてしまう人のことを揶揄して使われます。

仏教では、「貪欲」「瞋恚＝怒り憎むこと」「愚癡（痴）＝道理をわきまえない根本的無知のこと」を、仏道修行を妨げる三毒といいます。一説に、この“愚癡”のサンスクリット語「モーハ」を音写した「莫訶」「婆伽」などからできた言葉が「ばか」で、「馬鹿」はまったくの〈当て字〉だともいわれます。

くらしに役立つ情報紙

きづな

2022年 春彼岸号

●くらしの知恵袋…作ってみませんか？
●仏事のこころえ…花まつり
●和・漢・洋……「ことわざ辞典」
●仏事の豆知識…お寺めぐり
●生活の中の仏教語…馬鹿

— 明治22年創業の信用と実績 —

墓石・採石・生コン・建設業・不動産取引業

森近石材有限会社

〒720-0311
福山市沼隈町草深2564-2
TEL (084) 987-2133(代)
TEL (084) 987-2934(夜)
TEL (084) 987-2820(展示場)
FAX (084) 987-2714

歳時記 お水取り

古都・奈良に春を告げる“春迎え”の行事で、「お水取りが終わると暖かくなる」といわれます。

「修二会」の行の一つ

「お水取り」は、奈良・東大寺二月堂の「修二会」の行の一つです。修二会とは「修二月会」を略したもので、2月に修する（執り行う）法会を意味します。この法会は、国家安泰、五穀豊穣などを願って奈良時代から諸寺院で営まれてきました。

修二会の期間中、東大寺二月堂では多くの行事が執り行われます。なかでも一般によく知られるのが、3月12日の夜に始まる「籠松明」と、翌13日深夜（午前2時頃）から行われる「お水取り」です。

京都を中心とした年中行事の解説書で、江戸時代初期にまとめられた、『日次紀事（ひなみきじ）』にも、大松明の明かりに先導された僧たちがお堂を巡り、夜半を過ぎて厳かにお水取りの行をする様子が記されています。

現在の「お水取り」も大松明に先導された練行衆（修二会を行うために選ばれた僧侶たち）が二月堂の南階段を下り、良弁杉のもとにある若狭井から“ご香水（こうずい）”を汲んで本堂に戻り、ご本尊の十一面観音菩薩像にお供えします。

“ご香水”はどこから？

このご香水は、3月2日の夜、福井県小浜市の若狭神宮寺境内から汲み上げられ、「お水送り」の神事を経て奈良に送られてくるものです。因みに、若狭地方では「お水送りの行事がすむと春が来る」といわれているそうです。

若狭から送られた二月堂のご香水は、その年の仏事に用いるために5つの壺に入れられ、内陣の須弥壇の下に収められます。

また、ご香水をいただくと、諸病諸厄を免れるということで、この霊水を求めて参詣する人も多いといいます。

「お水取り」を詠む

次の2句は、高い場所にある二月堂の階段を上り下りする、僧の沓音を詠んだものです。

・水取りや氷の僧の沓の音　芭蕉

・沓の音水の音しぬ二月堂　大魯

＊大魯は江戸中期の俳人で、蕪村の弟子でした。

くらしの知恵袋

作ってみませんか？

コロナ禍で在宅時間が増え、いままでは市販のものを買っていた食品なども、自分で作る楽しみを発見したという方も多いようです。実際に作ってみて「なーんだ簡単にできるんだ！」と実感すれば、きっとまた作ってみたくなるのではないでしょうか。

ザワークラウト“豆知識”

ザワークラウトは、ドイツ式にソーセージや黒パンと食べてももちろん美味しいですが、煮込んだり、炒めたり、また日本式にご飯と一緒もおすすめです。

ところで、ビタミンCが豊富なザワークラウトは、その昔、長い航海に出た船員たちの健康維持に大いに役立ったといいます。

ハワイ諸島を発見したことで知られる、イギリスの探検家・通称キャプテン・クック（1728～1779）は、南太平洋探検の際にザワークラウトを船に積み込んで出航し、ビタミン不足によって船員たちが壊血病になることを防いだと伝えられます。

◆手作り／その(1)

「ザワークラウトを作る」

ザワークラウトはドイツ語で“酸っぱいキャベツ”という意味です。確かに酸味が特色ですが、酢漬けにしているわけではなく、乳酸発酵をうまく利用して作る、ヨーロッパ版「キャベツの漬けもの」です。

・材料

キャベツ……1個
塩……キャベツの重さの約2％
香辛料……ローリエ、キャラウェイシード、粗びき黒コショウなど
＊タマネギ……1個

注：タマネギはなくてもよいですが、入れるとより美味しくなります。香辛料はお好みで（500ｇほどのキャベツに、ローリエ…1枚、コショウ・キャラウェイシード…各小さじ1/2を目安に）。

・作り方

①水洗いしたキャベツの芯を取り除き、粗めの千切りにする。（＊タマネギを使う場合は、みじん切りにする）
②ボールに①と塩、香辛料を加え、手でよく混ぜ合わせる。
③②をポリ袋（破けないように二重にするとよい）に入れ、よく空気を抜いてから、口を輪ゴムでしっかりとめる。
④③をそのまま室温で1週間ほど置いた後、冷蔵庫に移す。

注：ただし、乳酸発酵の進み具合は、夏場は早く、冬場はゆっくりなので、室温に置く期間はその都度加減し、ときどき味見をして美味しい酸味がついてきたところで、ポリ袋のまま冷蔵庫に移します。

《作るときのコツ》

- 乳酸菌を上手に育てるには、ポリ袋の空気をしっかり抜くことが肝心です。ジッパー付きポリ袋を使用する場合も、空気をできるだけ押し出すようにします。
- ザワークラウトは漬けものの一種ですから、各家庭それぞれの味があってよいのです。香辛料（唐辛子やおろしニンニクを加えてもよい）や漬ける期間なども、いろいろ試行錯誤をしながら、好みの味を見つけるようにしましょう。

仏事のこころえ

花まつり

「花まつり」は、4月8日のお釈迦さまの誕生日をお祝いする行事です。宗派を問わず、各地の寺院で行われますから、もし、近隣で「花まつり」が催されているお寺があれば、出かけられてはいかがでしょう。

「花まつり」の由来

「花まつり」は、灌仏会、仏生会、降誕会などとも呼ばれ、一般に4月8日に行いますが、旧暦の5月8日に行うところもあるようです。

この行事は、もともとはインドで始まり、4世紀には中国でも行われるようになったといわれます。日本においては、推古天皇の時代（7世紀初め）に奈良の元興寺（がんごうじ）で行われたのが始まりと伝えられています。

この行事が「花まつり」と呼ばれるようになったのは明治時代以降のことです。この呼称は、お釈迦さまがお生まれになったインド東北部（現在はネパール領）のルンビニーが、さまざまな花の咲き誇る花園であったと経典に記されていることや、お誕生日の4月上旬は、日本でもいろいろな植物が花開く時期でもあることに由来します。

花御堂と“甘茶”

「花まつり」では、サクラやレンギョウ、ツバキなど季節の花々を飾った花御堂が、お寺の境内や本堂に設えられます。そして、花御堂の中央にはお釈迦さまの像が安置され、この「誕生仏」に“甘茶”をかけてお祝いをするのが習わしです。

この甘茶については、次のようなお話が伝えられています。

お釈迦さまがお生まれになったとき、龍が天から舞い降りて甘露（甘い水）という霊水をふらせ、その霊水がお釈迦さまの産湯に使われたというのです。

また、「花まつり」を「灌仏会」と呼ぶのは、誕生仏に甘茶を“灌ぐ”ことが由縁だともいわれます。

お釈迦さまの誕生仏とは

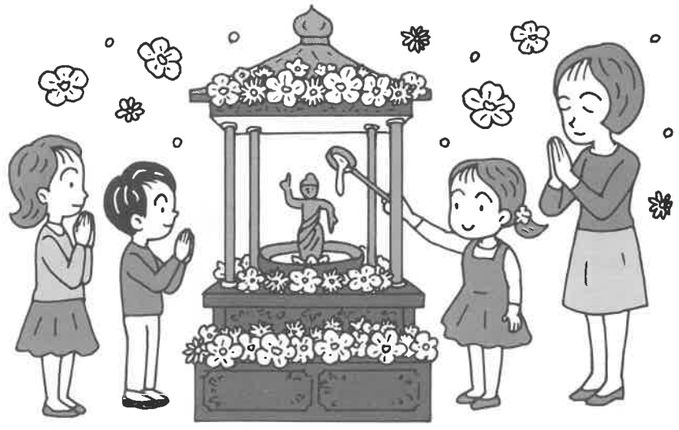
花御堂の中央に安置される「誕生仏」は、お生まれになったばかりのお釈迦さまのお姿を表すものです。

その像は、赤ん坊らしくふくよかな上半身は裸で、腰には僧侶が身につける裙という衣をまとい、右手は天を、左手は地を指しています。

このお姿は、お釈迦さまがお生まれになってすぐに立ち上がり、7歩歩いて、右手で天を、左手で地を指し、「天上天下唯我独尊」と唱えられたことによるものだと伝えられます。

この「天上天下唯我独尊」を、「世の中で自分だけが尊い」と誤解して解釈する人もいますが、そうではありません。このお言葉の真の意味は「この世に生を受けた一人ひとりの命は、他の誰とも代わることのできない尊いもので、それぞれ価値があり、大切にされるべきだ」ということです。

「花まつり」の花御堂に安置された誕生仏は、そのことを私たちに示してくださっているのです。



＊宗旨・宗派や地域によって異なる場合があります。